



202号

2015 / 4 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



「バトンの練習をする小学生たち」 208年3月15日 杭州 撮影：満柏

日本ではバトンを操る競技があったり、バトンを操りながらパレードする様子もよく見られるが、バトン競技は中国ではあまり知られていません。国際交流の催しで、中国の小学生が日本の指導者に指導してもらう機会がありました。小学生たちは、バトン競技でしばらく汗を流したあと満面の笑顔で「はい、チーズ!」。(杭州の小学校で)

‘わんりい’ 4月号の目次は最終ページにあります。

先月、スズメについてお話させていただきましたが、思いがけず、様々なお話が伺えました。四川省にお住まいの大川さんからは、お住まいの近くにいるスズメは日本と同じような大きさであること、もう少し高地のスズメは人里に近くてもかなり小さく感じたことなどをメールで伺いました。また、大連市に2年間お住いだった寺西さんからは、大連ではスズメを見かけたことはなかったとのお話もありました。最近余り見かけないという点は、「我が家の庭にはよく来て、遊んでいる。」とのお話もありました。

どうやらスズメ達は、住む場所も、体の大きさも、環境に順応しながら、自分達の住みやすい場所を見つけているようですね。人間が一部を見て、小さいのだ、少なくなっただのと話題にするのを、不思議に思っているかもしれません。

と言いながら、今月も鳥、北京のハトのお話をさせて頂きます。北京で、日本のように沢山のハトを見たことはありません。時折、4,5羽一緒にいるのを見かけましたが、人間の足元で餌をついばむような光景に出くわしたことはありません。

ネット上で、中国の方たちが、日本の公園で沢山のハトに囲まれて、「美味しそうなハトが一杯いる」と思ったという話を読みました。確かに中国にはハトの料理が沢山あります。菜单(メニュー)には、「鳩」ではなく「鵠」という字を使っています。何度か食べてみましたが、特に印象に残るような料理ではありませんでした。骨付きなので、少し食べにくい感じがありました。

しかしハトのスープには、ちょっとした思い出があります。家から20分程バスで行く所の小さな食堂で食事をしたことがあります。大衆食堂ですから、壁に料理の名前と値段を書いた紙があれこれ貼ってあり、その中に「自慢料理」として「鵠湯(ハトのスープ)」が有り、心臓の病気に効くとの話を聞きました。

それから暫くして、友人のお母様が不整脈に悩まされていると伺い、このハトのスープを届けたいと

思いました。密封容器を持って買いに行き、どうしたら持ち帰りだと分かってもらえるだろうと、頭の中であれこれ想定問答をしながら、その食堂へ行ったのですが、案に相違して、容器を見せただけで持ち帰りとは分かってくれました。店の片隅で待っている間に、同じように食事はしないで料理を持ち帰る人が来ました。北京では、料理の持ち帰りは珍しいことではないのです。そう言えば、レストランで食事をして、余ったものは「打包(ダーバオ)」と言って持って帰る習慣がありますから、食べないで持って帰るのもありなのだと気が付きました。

今日のお話は、ハトの料理ではありません。公園などで日本のように沢山のハトは見かけませんが、北京では、まだ伝書鳩を飼っている人たちがいます。昔は日本でも、随分沢山の伝書鳩が飼われていました。実用では、新聞社で写真の搬送等に利用されていたのが最後でしょうか。ハトの帰巢本能を利用するので、新聞社の屋上にはハト小屋があって、朝夕の運動で新聞社の社屋の周りを旋回するハトの群れをよく見かけました。

通信手段が発達して、ハトのお仕事がなくなっても、愛玩用として飼って、ハトのレースに参加する人たちがいました。今でも日本鳩レース協会があって、活動を続けておられるようですが、私の家の周りでは、鳩小屋を見かけなくなりました。

それが北京では、マンションの窓から見える範囲で、3箇所ほどでハトの群れが飼われていました。朝夕20羽近くの群れがそれぞれの巣のある近くで旋回しながら飛び回ります。時には、2チームが交錯しますけれど、又きちんと分かれて飛び交います。時々、間違っって他のグループに混じってしまい、気が付いてから、慌てて自分の群れを追いかけて合流するハトもいて、思わず笑ってしまうこともありました。

そんな光景を、昔の日本の空を思い出しながら、暫し見とれていましたが、北京でも、こんな光景はだんだんに見られなくなるのでしょうか。

Jūn zǐ bú qì
君 子 不 器

君子は器ならず

桜美林大学名誉教 / 孔子学院講師 植田渥雄



この表題にある「器」とは何でしょうか。「器」にはいろいろな意味がありますが、ここで言う器とはそれぞれ用途の定まった器物のことです。これを人間に例えれば、専門分野の決まった人、いわばスペシャリストということでしょうか。では、「君子」とは何でしょう。この言葉は『論語』の中に幾度となく出てきます。『論語』は君子の心得を説いた書物だと言っても決して過言ではありません。それでは『論語』の中の「君子」とはどんな人のことを言うのでしょうか。

これには二通りの意味があります。その一つは人の上に立つ人という意味です。リーダーという意に解してもよいかと思います。上司と部下という関係から見れば上司を指します。もう一つは、それにふさわしい人格を備えた人という意味です。たとえ地位が上であっても、その地位にふさわしい人格が伴わなければ君子とは言えません。もちろん統率力が問われるわけです。そして統率力ということになると、自分の専門分野だけでなく、あらゆる分野に気配りができなければなりません。

したがって表題の意味は「人の上に立つ者は自分の専門分野にこだわらず、組織全体に目が行き届かなければならない」ということになります。現代風に言い換えれば、ゼネラリストということになるでしょうか。

ところで孔子は何をやらせてもうまくできるマルチ人間だったようです。ある人が孔子の弟子の子貢に聊か揶揄を込めて「あなたの先生は聖人かい。実に多能な人だな」と言うと、子貢はむき

になって「もちろん天も認める聖人といえましょう。更にその上に多能でいらっしゃいます」と答えました。

そのことを耳にした孔子は「吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉。不多也 (Wú shào yě jiàn。Gù duō néng bǐ shì。Jūn zǐ duō hū zāi! Bù duō yě!)」(吾少くして賤し。故に鄙事に多能なり。君子多ならんや。多ならざるなり)〈子罕第九〉と呟きました。「私は幼いころ貧乏だった。だから色いろ細ごまとしたことができるようになっただけのこと。君子は多能である必要があろうか。そんなことはないよ」。これがこの呟きの意味です。

他方では「及其使人也器之 (Jí qí shǐ rén yě qì zhī)」(其の人を使うに及ぶや之を器にす)〈子路第十三〉とも言っています。「人を使うときには相手の専門分野に応じて適切に配置する」という意味です。君子はすべての分野で専門家である必要はないが、分野ごとに人々の能力を見極める眼力が求められる。

また「无求备于一人 (Wú qiú bèi yú yì rén)」(備わらんことを一人に求むる無かれ)〈微子第十八〉とも言っています。これは孔子が日頃から敬愛してやまなかった歴史上の人物周公が、その息子に語った言葉を伝えたものです。上司たるものの、部下にマルチ人間であることを求めてはならない。それよりも部下の、スペシャリストとしての能力を引き出すことが肝要である、というわけです。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

【前回までのあらすじ】楚国で玉工として働いてきた莫存は年老いて仕事をやめ故郷へ帰ることにしました。その途中、死したとてつもない大きな魚のお腹から「和氏璧」が発見された現場に通りがかりました。莫存はお金でそれを買取り自分の故郷の国・趙国へ持ち帰りました。そして「和氏璧」は40年ぶりに再び人の手に戻りました。



「和氏璧」を手に入れた莫存でしたが、「個人の力でこの希世の宝玉を保持するのは至難なことだ。当面は「和氏璧」が発見されてそれを自分が持っていることは秘密にしておこう。その内、折を見て宮廷に献上するのがよいだろう」と考えました。

さて、趙国には妙賢という大宦官がいました。彼は趙国宮廷の宦官達を統率する、宦官の第一人者でしたが、同時に玉石の収集家としても有名でした。妙賢はこれまでの生涯で数えきれない玉石を蒐集しており、常々「天下の名だたる玉石は全て自分の許にある」と豪語していました。ところがある日、『いい玉石を持っている』という者が訪ねてきている」と家来が妙賢に報告しました。妙賢は「いくらいいい玉石と言っても、自分が蒐集しているものには及ばないだろう」と思いながらも、好奇心に突き動かされ「その者を連れて来い」と命じました。

妙賢の前に連れてこられたのはまさに莫存です。「和氏璧」のような希世の宝石を庶民である莫存が持ち続けてはいけなないと莫存は知っていたので、「和氏璧」を手に入れて以来、ずっと「和氏璧」をどのような機会に趙王に献上するかを考えてきました。よくよく考えた末、妙賢という人物は玉石の愛好家と知られており、宮廷では大王

の側近として仕えているのですから、「和氏璧」を妙賢に渡せば趙国のものとして献上して貰えるのではないかと思い、妙賢に面会を求めたのでした。

妙賢は部屋に連れてこられた莫存を見、粗末な布地の服を着た姿を見るや軽蔑を込めた口調で問いかけました。

「素晴らしい玉石を持っていると聞いたが本当か？」

「もちろん嘘ではありません。旦那様のように玉石に詳しいお方は一目でその価値がすぐお分かりになる筈と思います」

「口は旨いが、そちが今日持って参ったものがさほどのものとは思えぬ。天下の優れた玉石は既にわしの倉庫に収められてある。それらを超えられる自信があるなら、さっさと持ってきたものを出して見せるが良い。自信がないなら早く帰った方がよからう。わしはとても忙しいのだ」

「はい、どうぞ、ご覧くださいませ」

莫存は袋を背中から降ろし、「和氏璧」を幾重にも包んだ風呂敷を用心深く一枚一枚解いてゆきますと中からごく普通の木箱が現れました。莫存はさっと前に進んでその木箱を妙賢の手前の机に置きました。ずっと冷たい眼差しで莫存の様子を見ていた妙賢は、今手元に置かれた木箱も自分の手で開けようとはせず、手振りで莫存に開けろと指示しました。

莫存はゆっくりと木箱の蓋を開け、絹で包んだ中の物を大事そうに取り出すとそれを机に載せ絹を解きました。そして包まれた物が露になると、妙賢は目玉が飛び出し椅子から飛び上がらんばかりに驚きました。それは妙賢がこれまで見たことのないほどの美しい玉石でした。妙賢はその玉石をじっと見つめたまま長い間言葉を失っていました。妙賢は玉石を載せた机の周りををぐるぐると

回ってためつすがめつ検分していましたがしばらくして莫存に尋ねました。

「この玉石には名があるのか。してその名は何という名前か」

「『和氏璧』』と言います」

「えっ?!『和氏璧』だと?! 一目見れば、この世の中で恐らく一番優れた玉石だと分かるが、まさかその昔、楚国で行方不明になった『和氏璧』だというのはあるまいな? 本物の『和氏璧』だというならどうしてそちの手に入ったのか。楚国から盗み出したとでもいうのか?」

「いいえ、私はそのような大それたことができる人間ではありません。『和氏璧』を盗んだのは実は伝説の巨魚なのです」

莫存は妙賢に尋ねられるまま『和氏璧』を手に入れた経緯、自分の身元など、いろいろと細かく話しました。妙賢は聞き終わると、頭を頷かせ髭を捻じりながら言いました。

「莫存、この玉石を譲って貰えまいか」

「はい、このような素晴らしい宝玉は私のような人間が所有するものではありません。国の宝にするべきだと思います。妙賢様が大王の側近でいらっしゃる、そして玉石についてもよくご存知の方だと知り、献上に参りました」

妙賢は莫存の言葉を嬉しく思い、様々な褒美を莫存に与え帰らせました。

その後、妙賢は「和氏璧」のために宝石を施した美しい箱を作らせて「和氏璧」を納め、毎日のように長い時間をかけて鑑賞しました。見ても見ても見飽きることがないばかりか、却ってますます手放し難くなるようでした。

「こんな素晴らしい宝玉を自分のものにできれ

ばどれほど幸せだろう。大王がご存じない間は自分の家で預かっておこう」

妙賢はこのように考えました。

しかし、「壁に耳あり」というではありませんか。「和氏璧」はあまりにも美しく素晴らしく、その虜になって現(うつつ)を抜かしている妙賢の様子から妙賢の家族が知るところとなり、さらには妙賢の家来たちも知るようになり、次第にその噂が広がると終には趙王の耳にも届きました。その時の趙国大王は趙恵文王でした。趙恵文王はある日妙賢に尋ねました。

「そなたが大層素晴らしい宝玉を手に入れたという噂を聞いているが本当か。本当なら朕にも見せてはくれまいか」

趙王の言葉に妙賢はびっくりし、すぐ跪いて答えました。

「ご英明なる大王さま、実はその宝物は、昔楚国で有名な宝物である『和氏璧』です。何十年もの間行方不明になっておりましたが、ごく最近、

我が国へ流れ込んで参りましたので購入いたしました。納めて置く箱や、宝石箱の置場を清めたりなどいろいろ手入れをしておりました。ご報告が大変遅れましたこと申し訳なく深くお詫び申し上げます」

「ほう、それは素晴らしい。そのような貴重な玉石が我が国に流れ来るとは我が国の繁栄の兆しであろう。されば「和氏璧」を迎え入れる盛大な催しをせねばならぬであろうな」

妙賢はやむを得ず、しぶしぶながら「和氏璧」を趙恵文王に献上しました。趙恵文王は華やかな奉納儀式を催し「和氏璧」を迎え入れました。そしてその希世の宝玉は長年の流離の運命を終え、その日から趙国の国宝になりました。

(続く)



満柏 画

井の中の蛙大海を知らず

三澤 統

私の調べた諺・慣用句 38

この諺は有名かつ日常的にもよく用いられていますね。改めて用例を聞くまでもなく皆さんもよくご存じだと思います。

辞書にはそれぞれ次ぎのように載っています。

▲小学館 デジタル大辞典：

「井のなかの蛙(かわず)大海を知らず 自分の狭い知識や考えにとらわれて、他の広い世界のあつことを知らないで得々としてゐるさまをいう。井蛙(せいあ)」

▲小学館 日中辞典：

「井底之蛙 jǐng dǐ zhī wā 井

の中の蛙 見識の狭い人」

この話の出典は、莊子・秋水編です。では、どのような話でしょう。

ある古井戸の中に一匹の青蛙が住んでいました。ある日、蛙は井戸の周りで海からやって来た一匹の海亀に出くわしました。蛙は海亀に向かって得意げに言いました。

「あのね、僕はここに住んでいてとても楽しいよ。



嬉しい時には井戸の縁にぴょんとジャンプしたりするし、くたびれたら井戸に戻ってレンガの穴の中で寝るんだ。頭と口先だけを出してゆったりと全身を水の中にひたしたり、ふわふわな泥土の上を散歩したりしてとっても気持ちが良いんだ。それに僕はこの井戸の主だから、この井戸の中で僕は、僕の好きなように過ごせるんだ。時々、君もここに遊びに来るといいよ」

海亀は青蛙の話を知ると、ちょっと井戸の中へ入ってみたくまりました。しかし、井戸の入口が狭いので、左脚を伸ばしきれないのに右脚は井戸の縁につかえてしまいました。亀はあわてて井戸から離れて、蛙に大海の様子を話しました。

「君は海を見たことがあるかい？ 海はね、ものすごく広くて何千里あるかも分からないくらいだよ。深さもね、ものすごく深くて何千丈あるかも分からないんだ。それでね、昔、滅多にないような大洪水があつて、それはそれは大量の泥水が、あつちこつちの川から海に流れ込んだときでも、海の水位は少しも上がらなかったし、また別のとき、何日も何日も大日照りが続いたときも海の水は少しも水位が下がらなかったんだ。海はね、洪水や日照りの影響をまったく受けないほど広くて深いってことなんだ。自由に楽しいってというのは、そんな大きな海に住んでいてこそ本当に自由に楽しいって言えるのさ」

井戸の中の世界しか知らない青蛙は海亀の話を聞いて、びっくりしてぼかんとしたまま何も言えませんでした。

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又‘わんりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

上海市を書くのは、今回が2度目である。1度目は、2011年11月号(168号)である。この時は上海に旅行された日本人は非常に多いであろうし、私が有名な観光名所を書くのも如何なものかと思ったので、「タテ軸(歴史)の上海」として12～13世紀以降の歴史に登場する上海について別の角度から書いてみた。今回はどちらかと言えば、「ヨコ軸の上海」である。さらに、上海から向かった「普陀山」という仏教の聖地がとても深く印象に残ったので普陀山について詳述した

い。上海にご関心のある方は、ネットで168号を参照して頂ければと思う。

昨年9月24日、成田発CA158便(中国国際航空)は、上海に向けて飛び立った。昨年の夏、大連に在住の中国人の友人が普陀山に行こうと何度も言うので、まだ行ったことがない所でもありそちらに行くことにした。大連で仕事をしている時、知人が普陀山に今年も行ってきたと言うのでそんなに何度も行くところなのかな?とっていた。いろいろ調べてみると、そこは中国の四大仏教聖地のひとつであることを知った。

普陀山行きを勧めた友人は信仰心が篤く、毎月1日と15日には欠かさず大連市内にある松山寺という寺院にお参りすると言う。なぜ1日と15日なのかは分からない。私も一度15日に松山寺にブラリと出かけてみたが境内は人でごった返していた。中国国内はどの宗教の信者が多いのか、私ははっきりとは知らない。日本と異なりイスラム教寺院(清真寺)や道教寺院があちこちにあり、また内陸部では日本の氏神様の信仰のような地域もあるであろうが、やはり仏教信者が一番多いのではないだろうか。



揚州飯店門口

9月24日、飛行機は無事上海浦東空港に着陸した。定刻より約30分早く着陸したため上海の友人はまだ来ていなかったが、ほどなく手を振りながら現れた。友人は山東省の出身であるが、大連外国語学院で日本語を学び、卒業後上海で仕事をしている。彼女は大連で中国語教室に通ったときの私の先生である。まもなく大連から春秋航空が定刻通りに到着し2人の友人とも合流することが出来た。

我々は上海の友人のご主人の車で取りあえずホテルまで送っ

ていただくことにした。ご主人とはホテルで別れ、我々4人は昼食に行くことにした。レストランは事前に友人に伝えてあった「揚州飯店」に案内していただいた。このレストランは南京路で一番賑やかなあたりからほんの少し入ったところにあった。店の前に立った時、貫録があり歴史を感じる佇まいに私はここにしておかたと思った。ところがである。ドアを開けた途端、お店の人に「お昼は2時で終わり」と申し渡された。我々が着いたのは2時をほんの少し回っていたが、まさかだめだとは夢にも思わなかった。交渉してもらったが「不可以」の一言。夕方また来ればいいと思い、すぐ近くの店で昼食を摂ることにした。実は旅行に行く前に、田井さんから「以前Yさんが上海に行った時、揚州飯店の五目チャーハンがとても美味しかったと言ってましたよ」との情報を入れていただいていたのである。昨年の‘わんりい’9月号で揚州市について書き、そこで五目チャーハンの由来を書いたことでもあるし、この店で食べようと思っていたのである。

食後、大連から来た二人のうち一人は上海は初めてで豫園や南京路を見て回りたいと言うので二



宋慶齡故居入口

手に分かれ、私と上海の友人は以前からぜひ見たいと思っていた「宋慶齡故居」に行くことにした。タクシーに乗ると、ほどなく宋慶齡故居に着いた。そこは淮海中路に面していた。道路に沿って高さ3メートルくらいのグレーの長い壁が続き一目で彼女が住んでいた邸宅だと分かった。宋慶齡は、宋家の三姉妹（「宋姉妹」という書名の文庫本が角川文庫から出版されている）の次女である。

あまりご存じでない方のため、故居の案内をする前に少し宋慶齡の人生を辿ってみたい。彼女は1893年（明治26年）1月27日に上海で生まれた。父は客家である宋耀如、母は倪桂珍と言った。資産家の家に生まれ何不自由なく育った彼女は、上海市内にある「上海中西女塾高中」卒業後、14歳で長女・霽齡の留学先でもある米国・ジョージア州のウエスレียน大学に入学した。1912年、前年の辛亥革命を経て中華民国・南京臨時政府が成立し、孫文が臨時大統領になる。卒業後、1913年に帰国。翌年から父が支援していた孫文の英文秘書を務めた。1915年10月に東京で孫文と結婚（孫文は3度目の結婚）。結婚後は孫文の活動を必死に支えた。1925年彼女が32歳の時、心から尊敬していた孫文が死去。（享年59歳）翌年中国国民党・中央執行委員になる。その後、蒋介石や宋一族との対立を深めていく。1945年第二次世界大戦が終わり、1949年に中華人民共和国が成立。中央人民政府副主席を務める。1959年には国家副主席に就任。1966年から1976年までつづいた文化大革命の中で、資産家の出であったことなどから捕えられそうになるが

毛沢東により窮地を脱する。1976年毛沢東死去。1981年病気が悪化し危篤となる。時の第5期全人代常務委員会は彼女に「中華人民共和国名誉主席」の称号を授与した。5月29日、88歳で死去。

まだまだ記することはたくさんあるが、中国が大きく変貌した一世紀の中で波乱万丈の人生を送ったのである。死後は上海市内にある「宋慶齡陵園」に葬られた。孫文の墓地は南京・紫金山中腹にある「中山陵」であるが、慶齡は合葬を望まなかったのだろうか。お互いに尊敬しあっていたようであるが、近代革命先行者（＝先駆者の意）として「国父」と呼ばれる孫文にすこし遠慮したのかと思ったりする。

さて、覆いかぶさるように葉が広がっている木々を見上げながら門に入る。受付があり20元支払う。中に入ると記念広場が広がっており、その中に椅子に座った宋慶齡が鎮座している。大理石の彫刻のようで真っ白に輝いていた。すこし微笑んだおだやかな表情をしている。その奥が「宋慶齡文物館」である。正面に彼女の胸像が置かれ、そこから順に展示物を見て回った。彼女の自筆の書や写真などが所狭しと展示してあったが、一番目を引いたのは孫文との結婚の誓約書である。漢字とカタカナで書かれているが、果たして二人は日本語はどの程度理解できたのだろうか。とりあえず内容を紹介したい。まず最初の一行は、「今般孫文ト宋慶琳トノ間ニ婚約ヲ結ビタルニ付、左ノ諸件ヲ誓約ス」と書かれ、次のように三点書かれている。

- 一、成ルヘク速ニ支那ノ国法ニ依ル正式ノ婚姻
手続ヲ執ルヘキ事
- 二、将来永遠ニ夫婦関係ヲ保続シ各自相互ノ幸
福ヲ増進スルニ努ムヘキ事
- 三、万一本誓約書ニ背反スル行為アリタル時ハ法
律上並ニ社会上ノ制裁ヲ受クルモ各自何等
依存ナキコト 從テ各自ノ名誉保持等ノ為
メ各自又ハ其ノ親族ヨリ各自ニ對シテ為ス措
置ニ付イテハ一切苦情ヲ申出ヲサルヘキ事

誓約書は、三通作成し孫文、宋慶齡が各一通、もう一通は立会人で弁護士の和田瑞氏が保有するとした。



日本語で書かれた孫文との結婚の誓約書



宋慶齡故居内の石像

この誓約書は本物だと思うが、何点か気になることがある。まず記されている宋慶齡の名前も最後の自筆の署名も宋慶琳となっていることだ。次に孫文と和田弁護士の署名の下には印鑑が押されているが宋慶齡の自署の下だけは押されていない。自分の保管用であるから押さなかったかもしれない。ほかの2通は押されているのか確認したいものだ。本誓約書の日付(結婚式の日付ではない)は、1915年10月26日となっているが、〈支那の国法〉による結婚式はいつなのであろうか。ある本には1915年の10月25日に結婚したと書かれているものもあれば、ある資料は1914年と書かれている。何かすっきりしないものがある。ネットで調べると、「結婚式については諸説ある」とあり、「この結婚を整えたのは資金援助をしていた梅屋庄吉である」とあった。梅屋庄吉の説明をする紙幅はないが、日本の実業家で孫文の支援者である。私はまだ行ったことはないが、上海の紹興公園に彼の銅像がある。

ところでなぜ立会人のもとで結婚誓約書を書いた

のであろうか。孫文は立派な人物であるが、男女関係においては疑問符が付く。1902年、彼は中国に妻がいたにもかかわらず日本人の大月薫という女性と駆け落ちに近い形で結婚している。中国人の妻とは1915年に離婚が成立しているので、いわば重婚である。日本人妻との間には一人の女の子を設けたが3年で離婚している。日本には彼の外孫もいる。宋慶齡とは中国人の妻との離婚が成立してから結婚式を挙げたのであろう。従ってとりあえず誓約書という形にしたのかもしれない。

ここでもう一度合葬について付記したい。ネットによれば、生前に埋葬のことを決めていたと書かれているものがある。慶齡の死の3か月前に彼女の世話を53年の長きに亘って続けてきた「李燕娥」という女性が亡くなったが、慶齡は彼女に対して自分たちの骨灰を一緒に埋葬することを誓っていたというのである。事実と思われるがこの誓いの裏には孫文との合葬という特別扱いを望まない高潔さを見る思いもするが如何であろう。孫文との結婚生活が10年であるのに対し李さんとは53年もの間苦楽を共にしたのであるから、情の深さは孫文と言えどもかなわないであろう。

文物館を出て宋慶齡が長く過ごした邸宅に入る。2階建の堂々とした建物である。客間、食堂、公務用の部屋が続くがそれぞれ調度品などはとても豪華である。暖炉付の寝室は広くて華やかな雰囲気である。その近くに李燕娥の寝室がある。広いが質素である。1回には土産物コーナーがあり、彼女の写真4～5枚と本を購入した。ゆっくり見た後、芝生のかかなり広い庭の見える所に出たが、残念ながら庭には入れなかった。庭の方から邸宅全体の写真が撮りたかったが。

実は宋慶齡の故居は、北京市内の故宮博物院の近く、後海のほとりにもある。彼女はこの邸宅で1963年～1981年、亡くなるまでの18年間住んだ場所である。以前は清朝最後の皇帝である溥儀の父親の邸宅であったが、周恩来の配慮でここに住ませたようだ。勿論李燕娥が身の回りの世話をしたのであろう。

(続く)

詩人^{いん せ りん}尹世霖の童詩の世界⑪

金子總子・訳

yáo lán 搖籃

yáo lán
搖籃，
shì yī zhī xiǎochuán
是一只小船…
mā ma de shǒu
妈妈的手，
sòng nǐ chū gǎng wān
送你出港湾。
yōng bào nǐ de jiāng shì dà hǎi
拥抱你的将是大海，
a dà hǎi
啊！大海，
làng huā ér fān fān
浪花儿翻翻……



yáo lán
搖籃，
shì yuè yá ér yī wān
是月牙儿一弯…
mā ma de shǒu
妈妈的手，
sòng nǐ yóu lán tiān
送你游蓝天。
yōng bào nǐ de jiāng shì xīng zuò
拥抱你的将是星座，
a xīng zuò
啊！星座，
càn làn de guāng huán
灿烂的光环……



shǒu lā shǒu 手拉手

nǐ lā wǒ de shǒu
你拉我的手，
wǒ lā tā de shǒu
我拉他的手。
chàng gē tiào wǔ zuò yóu xì
唱歌·跳舞·做游戏，
yī kuài r pǎo lái yī kuài r zǒu
一块儿跑来一块儿走。

wǒ lā nǐ de shǒu
我拉你的手，
nǐ lā tā de shǒu
你拉他的手。
shǒu shì lián xīn qiáo
手是连心桥，
lián zhe yī gè gè xiǎo péng yǒu
连着一个一个小朋友。



ゆりかご

ゆりかごは
一艘の小船だ
母の手が
おまえを 港へ送り出す
おまえを 抱いているのは 大海原
ああ！ 大海原
波しぶきが 逆巻く ……



ゆりかごは
三日月だ
母の手が
おまえを 大空へ 送り出す
おまえを 抱いているのは 星座
ああ！ 星座
キラキラと 光り輝く星の輪 ……



手に手をとって

キミが 僕の手をとり
ボクが この子の手をとる
歌い おどり 遊び
いっしょに 走って いっしょに 行く

ボクが キミの手をとり
キミが あの子の手をとる
手は心を つなぐ橋
ひとりひとりの 友達を つないでいる



先般、生涯学習フェスタが文化ホールで催されました。私は就業改善センターで中国料理を作りました。当初、手伝いを職員にしか頼みませんでしたが、作り始めた後、ほかにボランティアが5人も加わってくださいました。その中に、中国や中国語にとっても興味を持っている男性がいました。

彼は小麦粉をこねる時でも、中国語で話したり聞いたりして、とても楽しんでくれたようです。このように中国語が好きで、よくチャンスを逃さず中国語の会話をする故に中国語がよくできます。私たちもこのような好青年を見習うべきだと思います。

その時、私も手伝ってくれた皆さんと中国語や日本語で話し合い、楽しみながら中国料理を作りました。他の来館者も寄って来てタレなどの作りかたを興味津々に見学してくれました。ボランティアの皆さんも真剣に手伝ってくれて、知らず知らずの内に100人分余りも試食を作ることができました。用意したレシピが全部なくなるほど、試食に来た皆さんが帰ってくれました。皆さんが家庭でもたまたま中華料理を作って家族に御馳走してくれたら嬉しく思います。

光陰矢のごとし、月日の経つのが本当に早いものですね。瞬く間に六戸町での2年間の過ぎようとしています。この二年間を振り返って見ると様々な交流と体験ができて、充実した毎日を暮らしてきました。

まず、この2年間に文化ホールで通年、中国講座を46回行いました。17年度の「すぐ使える、鄧さんの中国語講座」は受講生約10人が文化ホールに集まって、3月8日に閉講式を行いました。その時、受講生の皆さんは「中国に行って見たい」と何度も言いました。特にシルクロードに興味があり、ぜひ行って見ようと話し合いました。その時、皆さんから、中国の旅行シーズンや注意事項についていろいろ聞かれまし

た。このように、講座を通して皆さんが中国に注目されたのが嬉しくなりました。私は皆さんに「中国で楽しくお待ちします」と約束しました。私もこの講座のためのテキスト作成や教え方などいい経験を積み重ねました。

他にもこの2年間、たまに翻訳を頼まれたことがあります。あまり難しくないとは言え、原文を十分理解した上で正確に翻訳することは、そう容易なことではなく、一つの言葉でも皆さんに教えてもらって繰り返し推敲しながら訳したのですが、頼まれた方は満足できたかどうか分かりません。また専門用語等もあり、辞書を調べたり皆さんに聞いたりして、いい勉強になりました。

また六戸町での生活はとても楽しかったです。休みの日には、家庭に招かれ、ご馳走をいただいたりした事もありました。どこかに連れて行ってもらい、いろいろな料理を食べたり、温泉での入浴を体験したりしたこともありました。そのため、私は刺身や納豆など中国人のけむたがる料理も慣れてきて好きになりました。当初、温泉のあまりの熱さ、常流のお湯にびっくりしましたが、今ではすっかり好きになりました。自分は、皆さんにあまり役に立たなかったのではないかと度々思いますが、こんなに親切に扱ってくださって誠に恐縮です。

JETプログラム国際交流員としての私の仕事もそろそろ満期になり、六戸町を後にしますが、町や皆さんから与えられた良い思い出は深く銘記して、決して忘れません。この2年間いろいろとお世話になった方々に、この紙面を借りて深く御礼申し上げます。

これから故郷に戻って他の所に赴いても、国際交流の面は精一杯続けて行きたいと思います。今後、もし六戸町に対しても町民の皆さんに対しても何か役に立つことがあれば、出来る限り尽力したいと思っています。

それでは、皆さん、今度は中国で会いましょう！

「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年(平成16年)から2006年(平成18年)の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。文章は原文のままです。

中国で古典が復活

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

このところのマスコミでは、世界のあちこちで騒乱が伝えられ、憂慮に堪えません。それらには共通の原因や論理があるのではないかと思いつつ、「文明」についての勉強をしながらその日暮らしをしています。

そんな折、3月19日付読売新聞に格好のネタがありましたので、その記事をテーマに始めようと思います。大見出しは「本場で活況 四書五経¹⁾」とあり、中見出しには「中国、論語など私塾ブーム」とあります。

イントロダクションは次のように書かれています。

「中国で、伝統的教養『国学²⁾』を子供たちに教える『私塾』が活況を呈している。背景には、中国の経済発展に伴って大国意識が高揚し、富裕層の間で伝統文化への自信が強まっている事情がある。習近平政権が掲げる『中華民族の偉大な復興』のスローガンも、国学ブームを後押ししている」

孔子を代表とする伝統的国学は、1949年の中華人民共和国建国以来消滅していました。特に1966年から始まった文化大革命の10年間は、「封建主義・資産階級の教え」として徹底的に封殺されてきました。しかし、近年では私塾に限定されてはいますが3000箇所ぐらいで国学を教えているそうです。世界第2の経済大国となったことで、富裕層の間では自国文化に誇りを持つ人が増えてきているとも言われます。

中国の私塾は、義務教育(小中9年間)外です。前政権(胡錦濤)時代には認可されていませんが、現政権では黙認されています。これは習近平政権が強調する「中華民族の偉大な復興」を実現させるためには、伝統文化や道德観を重視する国学を利用しよう

とする策に合致すると読んでいるからでしょう。

ともあれ古典といわれる四書五経、とりわけ論語などの日本人にも親しまれている教えが復活する兆しが見えてきたことは嬉しいことです。中国は鄧小平の「白猫・黒猫…」以来じゃにむに経済発展に突き進み、現在はGDPで世界第2位になるまで成長しています。その結果、昨今の貧富の格差は恐ろしいくらいです。その手段には、道德のかけらも見えませんが、私もこれが「儒教の国か」と思わされることをしばしば体験させられました。

考えてみれば、現代中国人は「論語」も知らないし、教えられたこともないのです。私が顧問をしている華人紙の陽光導報に「論語」を執筆したのも、中国人を刺激しようとしたことが動機でした。中国人の留学生から「日本人なのになんで論語を知っているのか」という質問がありました。そこで「日本の学校(私は私立の中高一貫校卒)では、中学3年から漢文という授業があり、教科書が論語だった」と答えましたが、びっくりしていました。

しかし、ここで心配なことがあります。「古きよき中国の復活」であればいいのですが…どうも動機が違うようです。習近平政権が唱えることは「中華民族の偉大な復興」です。まさに中華思想の復活であることです。ここでその中華思想なるものを要約してみます。

1.「中華思想」という思想

～「中国の思想」：竹内実(著)より～

儒教・道教・法家など様々な流派を源流とした思想がある。それらを総称して中華思想というが、あくまでも外部が貼ったレッテルである。中国との交渉がうまく進展しない場合、バリアとしての概念ともいえる。

しかし、中国には自称として「華夏」がある。「自分たちは天空の下に広がる台地の真ん中にいる。動き回る範囲は広く、人間もたくさんいて物産は豊かである。服装も儀式も立派で秩序がある。我々は中華である」。周辺には未開の「東夷・西戎・南蛮・北狄(総称して夷狄という)」があり、中華は「内」、夷狄は「外」。

夷狄は中華に服従し、尊敬する限り、中華は面倒をみる。中華より古い呼称が「華夏」、「中夏」である。中国の一番古い王朝が「夏（大きいという意）。夏は広い平原の真ん中の集落（中国）で黄河流域を移り住んでいた。中華思想というのは、漢民族及び漢民族に同化された周辺民族が、自然に身につけた自己認識である。中央にいて栄え、文化も高いという誇り（奢り？）だ。

＊日本では「原則として」は、例外がある事を暗示するが、中国では「原則」は厳格に遵守されるもの。例外措置は一切無い。中華思想が「中華思想」であるためには、自信を失ってはならず、強硬に主張する際には「強硬」でなければならない。頑迷固陋、古色蒼然である。

2. 中国人にとっての「中国魂」

～「中国人の愛国心」：王敏（著）より～

「修身齐家治国平天下」身を治めることが、家をまとめ、国を治め、天下を平和にする。（四書五経の大学より：紀元前430年ごろ）。儒教精神により国民の間に根付いた。国という概念の始まりは春秋時代。それ以前の殷や周の時代は単一または少数民族が集まった集合体でしかなかった。

周以降に周辺の西戎などの侵略で「国」という「勢力範囲・別世界」という認識が生まれた。「國」は“ある地域を城壁（口）で囲み、戈（ほこ）で守る”の意。中国人にとっての愛国心とは「国を愛することは自分を愛すること」。「自分のために国を愛せ」ということ。戦前の日本の「大和魂（滅私奉公）」とは異なる。

中国は理想のモデルを創るのが好きだ。愛国者のモデルは南宋時代の岳飛（1103～41）である。北方から侵略する金軍に身を挺して抗戦した。「民族文化と尊厳」を守るために。背中には「尽忠報国」の刺青があったという。

3. 「新常態＝ニューノーマル」

直近終了した全国人民代表大会で李克強首相は「新常態」と位置づける新たな経済情勢下での構造改革推進を表明しました。経済成長率は7%前後ということです。減速は明らかになりました。日本では

高度経済成長が終わりに近づいたとき「安定成長」とか「成熟社会」などという言葉が氾濫しました。「量から質の時代」ともいいました。中国では「新常態」というのでしょうか。見せ掛けの栄華は終わりにしてもらいたい。地位や財力をこれ見よがしに広いマンションに住み、高級外車やブランド品で身を飾るような中国人はもう見たくありません。これから何年かかるかはわかりませんが、私が望むような中国の大人（たいじん）になってほしいと思います。中国には数千年にわたって研鑽を継いだ「賢人の教え」があるのですから。

■注

- 1) 四書五経：儒教の経典で重要な書物を指す。四書は「大学・中庸・論語・孟子」をいい、五経は「詩経・書経・礼記・易経・春秋」をいう。
- 2) 国学：儒教や道教、仏教の教え、中国の歴史、思想哲学、書画、音楽、医学など多方面にわたる。儒教の場合、古代中国で倫理規範を説いた孔子の教えなどを記した経典が重要な教材となる。

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしくお願いいたします。尚、新年度の会費の納入は、3月一杯にお願いできれば有難いです。また、新入会を歓迎します。

年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回（2月・8月を除く）おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100（事務局）

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取り扱って頂けます。上記へお問い合わせください。

初秋の韓国低山歩き ①

(2014.9.27～10.1)

関根 茂子

昨年は8月お盆に韓国大田市近辺の低山歩きに出かけたが、暑くて暑くて大変だった。そこで、今年のS姉のお誘いは、安東（アンドン）市で開催（9.26～10.5）される国際仮面舞フェスティバルに合わせて9月末に韓国の山2つを目指すというものだ。

清凉山（チョンリャンサン）869mは、安東の北東にある展望の良い道立公園の山で仏教の痕跡が沢山残っていて、12の峰々の名前も仏教にちなんで付けられている。太白山（テペクサン）1577mは清凉山の北方にあり、南の智異山（チリサン）からずうっと北上していき、中国と北朝鮮の国境にある白頭山（ペクドゥサン）＝將軍さまの山へと続く白頭大幹と呼ばれる半島の背骨の一大山脈の盟主であり、こちらも道立公園の山とのこと、太白山（テペクシ）は高原にあるので、山頂への標高差は700m余の登り、また日本の信濃川よりも長い河川洛東江（ラクトンガン）と漢江（ハンガン）の源となっている山とのことだ。

S姉いわく「安東市は山形の寒河江市と姉妹都市で、西方にある河回（ハーフェ）村は2010年世界遺産に登録された。伝統的な建物と住居文化、村の中心には樹齢600年の樺のご神木があり、1999年に英国のエリザベス女王も73才の時に安東を訪れたほど～」とのことで、私は二つ返事



で参加を決めた。

韓国語会話ができるS姉のもと、韓国語が読めて英会話OKの若手Mさん、昨年の山旅後、韓国語学習を始めたTさん、ハングルは全くダメな私とYさん総勢5名のシルバー女子が集まった。韓国の一部屋はダブルとシングルの構成が一般的で、昨年はこのダブルベッドで困った。「費用はかさんでもツインとシングル部屋で」とお願いして空港近くのホテルを手配してもらう。

◆9月27日(土)

成田13:50発(イースタージェットの格安航空便、往復@23,670円)＝仁川(インチョン)16:35着。フライトは順調で定時に到着した。

まずは現地共同費用として1人2万円分を両替、レートは日本円1万円＝91,104ウォンだった。ここでも円安だ。空港の案内所で日本語のできる案内嬢に「宿泊先のスカイホテルに迎えの車を」と電話をかけてもらう。ついでに明日の安東市の宿も予約、ダブルとシングルの構成のVIPルームに布団を2組いれて部屋代は65,000ウォンで交渉がまとまった。

ホテル着後すぐに夕食にでる。石焼ビビンバとチヂミを注文。キムチ、カクテキ、モヤシのナムルなど小鉢が10個も並ぶ。これがすべてサービスなのだ。ビビンバ(@7,000ウォン)はとてもおいしかった。大きなチヂミは18,000ウォンだったが、



韓国舞踏

ホテルでもらった10%OFFのチラシを見せたら47,700ウォンになり、あれだけ食べて日本円で1人当たり1000円足らずとは！

帰路、明日の早朝発に備えて朝食用食料をコンビニで調達して帰館。今夜はS女史と2人だ。寝相が悪くてベッドから落ちた経験者のわたしは「ダブルベットをどうぞ」と譲られて安心して床に就く。

◆9月28日(日)

安東行き的高速バスが出る東ソウルバスターミナルへは地下鉄を乗り継いでいくのが安くて確実だ。

ホテルに近い地下鉄駅雲西(ウンソ)まで歩いていくつもりだったが仁川国際空港に送る客を乗せた車に同乗して駅に5時30分着、ところがS女史が「部屋にストックを忘れた」と彼女は取りに走る。その間に自動販売機で切符を買う。韓国の地下鉄の切符はカードで発行される。一人分運賃3,650ウォンを支払うが、下車駅でカードを返却すると500ウォンが戻るという仕組みだ。

10分後に汗だくで帰ってきたS姉といっしょに空港線の雲西駅5:53発乗車、弘大入口(ホンデック)駅で2号線に乗り換える。地下鉄車内の電光掲示案内板はハングルだけでなく漢字も出てきて助かる。路線毎に駅に番号がふられていて、通路には乗換案内が色別で表され分かりやすい。東ソウルバスターミナルのある江辺(カンピョン)駅に着いて自動改札にカードをタッチするが何度やっても私は「×」が出て通れない。無人駅なので困っていると、横に柵も何もないHELP通路があり、ノーチェックで出られることを韓国人が教えてくれた。先払い運賃なのだから出られて当たり前なのだ。

バスターミナル窓口で1時間後の8:20発の安東行き高速バス切符(@16,500ウォン)を購入後、朝食となるが、昨夜のビビンバを完食したわた



街角のパフォーマンス

しはおながが一向に空かない。マクドナルドしかやっていないのでコーヒー(@3,000ウォン)を頼む。ハンバーガーとセットで注文した仲間は5,500ウォンとのこと。これは日本並みの料金だ。

ゆったりしたシート的高速バスは途中トイレ休憩を1回はさみ、安東バスターミナルに11:15着、高速バスターミナルは市内から離れた郊外にあり、市内バス(@1,200ウォン)に乗り継いで20分、鉄道安東駅へ行く。

予約したモンモテルは安東駅の近くだった。荷物を置いて昼食と祭り見物に出かけよう。宿の主人に食事処のおすすめをたずねると、車で案内してくれるという。口で説明しても日本人にはわからないだろうということのよう。食後、地図をよくみれば、宿のすぐ裏手、安東名物のチムタク横町のお店に連れて行かれたのだった。

チムタク専門店は昼時で込んでいた。1皿では足りないという店の人の勧めで2皿注文。安東チムタクは、乱切りのジャガイモ、ネギ、ニンジンなどにぶつ切りの鶏肉と春雨を甘辛く煮込んだ郷土料理だ。注文の数詞「マリ」を耳にしたTさん、「マリ」は、動物、魚、鶏、全て数える単位とのこと。直径40cmもの大皿にたっぷり盛られた料理は、ほくほくジャガイモ(私にはこれが一番おいしかった)歯ごたえのある鶏肉がたっぷり入っている。長いままの春雨はハサミで切って食べるのだ。あの大皿に鶏1匹分の肉が入っていたのかな? 5人で2皿をがんばって食べたが、残してしまいもったいないことをした。

祭りスケジュール表によるとお祭り会場は3ヶ所に分かれている。すでに2時になっているので、バスに乗る会場に行く余裕はない。歩いて10分ほどの公園広場で3時からの韓国舞踏団公演を見ることにしよう。



雲の吊り橋

今日は日曜日、歩いて会場に向かう道も結構混雑している。公園には食べものや土産物売る出店が数列に並んでいる。仮面饅頭 10 個入 (5,000 ウォン) を会社のお土産に購入した。出店のテント列を抜けると体育館があり、その先の広場で催し物をしていた。音のする人だかりに惹かれてのぞいてみたり、店を冷やかしたり歩いて回る。

お目当ての華やかな衣装を身にまとった韓国舞踏団の舞姫たちはオバサマばかり、日舞をやる若い人が少ないように韓国も伝統舞踊には若者の関心は薄いようだ。次の韓国民謡ショーをみて 4 時に退席、街中でやっている催し物を見に戻る。それが参加型のイベントで商店街の休息コーナーでライブをしているだけだった。

露店のリンゴがおいしそうだったので、明日の山行用に 1 人 1 個宛買い求める。大きく立派なリンゴが 1 個 1000 ウォン、安東はリンゴの産地だけはあるお値段だ。パン屋で山用のパンを買いこむとこれは日本並みの価格 (@ 3,500 ウォン) だった。

歩いていると縫い目はオレンジ色のステッチ、黒地のトレーニングパンツ (@ 10,000 ウォン) が目に止まる。「M では入らないな」と思っていると店員が次々に大きいサイズを持ってきて試着をすすめる。熱意に負けて穿いてみると入ってしまった。というわけで明日からトレパンと饅頭を背負って山を歩くことになってしまった。駅前で明朝のバス乗り場を確認して宿に戻る途中で仮面をか

ぶった人の列に出会う。私と T さんはその列を追いかけて、街角の仮面パフォーマンスを見物後、宿に帰る。

モーターというと、韓国ではホテルよりは安い単なるお宿のことで、岩登り、沢登りに通っていたころから S 姉は利用していたという。日本では男女で泊まる場所というイメージだから、「主人と S 姉がモーターに泊まった！」と同行の男性の奥さんから怒りの電話がきたのもさもありなん。

細身の T さんがソファで寝るといってくれたので、2 ベッド、2 布団で 5 人が収まった。締めて 65,000 ウォンだから 1 泊 @ 13,000 ウォン (= 日本円 1,300 円) とは格安だ。

◆ 9月29日(月)

4 : 30 起床、安東駅前 67 番乗り場から 5 : 50 発清涼山行きバス (@ 1,200 ウォン) に乗車、道路にずらっと路駐の車が並び一昔前の日本の情景を車窓に市内を走り抜け、洛東江の上流に当たるダム湖を横目に清涼山へ 6 : 35 着。

身支度を整えて 6 : 45 出発。川沿いに少し歩き本流を橋で渡ると、山頂から縦走して下りてくる 1 つ目の登山口がある。清涼山の登山口は 4 つあるが、最も楽な一番奥の登山口から登ろう。清涼山道立公園の門 (7 : 00) をくぐって沢沿いの緩く上る車道を進む。後ろから乗り合いバスが追い抜く。奉化 (ボンファ) からの清涼山行きのバスのようだ。向かいの山に滝がかかるところにも登山口がある。その先にバス停とトイレがあり、案内所らしき建物は閉っていた。不要の荷を預けられるかと期待したのに残念！さらに進んであずま屋がある清涼寺登山口。ここが奉化からのバス終点だ。

4 つ目の登山口までそこから 20 分で到着、入口は木の階段だがすぐに小沢沿いの緑あふれる山道になる。私好みの森林浴登山道だ。去年、覚えたフモトナラという、標高が低い所に生えているのに葉柄がないナラの木が目につく (あれから日本でも桐生の里山でフモトナラを確認した)。樹木の間の山道は、葉っぱの緑のテントに覆われているようでいい気分登った。雨はたいしてあたらなかったが、雨音が激しくなり傘をさして歩いた。 (続く)

志津子と私 — 日中相互学習から老朋友に 張怡申 (佐藤紀子)

18年前のことでした。

志津子は東京から、そして私は中国から、同時に雪国の山形へやって来て、市の文化センターで会いました。当時、志津子は日本語教室で外国人に日本語を教えていました。私は志津子の生徒でした。

しばらくすると、志津子から中国語を教えて欲しいと頼まれました。当時、日本語がうまく話せない私にとっては、中国語で会話ができる人が現れたことが嬉しくて興奮さえしました。

中国語レッスンは毎週の水曜日にしました。勿論、中国語で行います。志津子に中国語で中国語を説明したことは、志津子の聴解能力をアップさせるより、寧ろ志津子を困らせていました。彼女は大学で中国語を4年間勉強したのですが、正確に聞き取れるのには、まだまだ難し過ぎる段階でした。

私は「灌鴨式(詰め込み式)」のやり方を選びました。志津子は聞く余裕も考える余裕もないくらい、一所懸命メモを取りました。その姿は、今となっても鮮明に目に浮かんできます。彼女は、レッスンから帰宅すると、その都度復習したに違いないことでしょう。

いつの間にか、私は日本語で中国語を説明するようになりました。とある日、「古代中国語の『走』と日本語の『走』とは、意味が同じだったの。例えば四字成語『走馬観花』の『走』は、走るということの意味するわ」と私が言いました。それを聞いた志津子は、すぐに中国語で「有意思、原来如此(面白い、成るほど)」と言ってくれました。二人は期せずして一緒に笑いしました。

また、いつの間にか、中国語個人レッスンは、互いの「暮らしレッスン」になりました。私は日本語で、目の前の悩みから昔の思い出まで志津子におしゃべりをして、同様に志津子も中国語で自分の大学時代の恋愛経験を喋り出すようになりました。表現のできない時、お互いに教え合い、通じ合うという喜びが満ち溢れていました。

こうして、いつの間にか8年間が経ちました。志津子は大学時代に結婚したご主人と別れることになりました。その頃の彼女の憂いを含んだ眼差しは、可哀そうでなりませんでした。少しでも力になりたかったのですが何もできませんでした。

やがて、志津子は中国での日本語教師の道を選びました。日本を発つ時は、見送りに行きました。志津子が8年間学習してきた中国語のノートをトランクにつめ、成田空港から日本を後にしました。

その時から2年後、私は難病にかかってしまい、中国で入院生活を送ることになりました。

病院の無菌室にいた時のことです。

ある朝、看護婦が来て言いました。「紀子さん、志津子さんという人が見舞に來ているよ。何か話がある？ 伝えますからね」と言いました。私は無菌室から出ることは許されないの、志津子に会うことはできませんでした。看護婦は私のメッセージを持って志津子に伝えに行きましたが、すぐに戻ってきて「志津子さんは外で泣いている」と私に伝えました。

目が熱くなりました。彼女はこの病院まで、12時間も電車に乗り、その後も数時間バスで移動して、ようやく辿り着いたのがこの無菌室でした。あの日、志津子はどういう気持ちで帰っていったのか、今でも聞く勇気がありません。

あれから、あっという間に10年もの歳月が経ちました。私は日本で元気に日々を送っています。志津子も元気で、中国で頑張っています。志津子は、生涯中国で日本語教師を務めたいと、私にとっても綺麗な中国語で言ってくれています。

昔は、中国に「師徒如父子」という言葉があり、日本語に訳すと「先生と生徒とは父と子の如く」という意味になります。志津子と私も、民族を超えた「師徒如母子」と言えましょう。言葉の学習からスタートした私たちの出会いと長年にわたって築きあげた私たちの絆や美しい友情をぜひ多くの方に知って頂きたいと思い紹介します。

フィリピン滞在記 ④---マニラのチャイナタウンで旧正月を体験

為我井輝忠

マニラに大きなチャイナタウンがあることは前回紹介したが、図らずも旧正月をチャイナタウンで過ごし、大変興味深い体験をすることが出来た。

今年の中国の旧正月(春節)は2月19日で、18日が大晦日にあたった。中国系の人々が多く住むチャイナタウンでは18日の真夜中12時を境にカウントダウンの大きな叫びがあちこちで聞かれ、同時に賑やかな花火が何十発と打ち上げられ、爆竹の激しい音も聞かれた。

そんな光景を見ていると、数年前北京で過ごした春節のことが思い出される。大みそかの晩、北京ではマイナス2～3度という気温の屋外で、寒さに震えながら花火や爆竹の鳴る音を聞いて、本場の旧

正月を過ごした。翌日の元旦には地壇公園での「春節文化廟会」という野外イベントに出掛け、伝統的な北京の正月を味わうことが出来た。

しかし、マニラでの旧正月は気温が日中は30度位まで上がり、あの寒さで震えながら体験した北京での正月がまるで別世界のような気がする。陽気な中国系の人々やフィリピン人たちの姿を見ていると、これが南国の旧正月かと実感した。

当地では、何よりも面白いと感じたのは春節パレードである。チャイナタウンは狭い地域なので、どこかでパレードが行われていても楽隊の鳴らす賑やかな音楽でどのあたりで行われているのかすぐわかり、その方向へ歩いていくとパレードに出会うことが出来た。恐らく世界のどのチャイナタウンでも共通しているのは、獅子舞と蛇踊りではないだろうか。

オンピン通りを2頭の獅子(赤と黄色い色をした)が爆竹の鳴る中を縦横に通りを動き回り、時には立ち上がったり、アクロバティックな仕草をしたりしている。獅子には北方系と南方系があるが、これらの獅子は南方系なのだろうか。一方、15人ほどの若者による蛇踊りも見事だ。一糸乱れぬそれでいて目まぐるしく動く様は日ごろの訓練の賜物だろうか。このいずれも横浜、香港、シンガポールで見た



チャイナタウンの入口に建つ牌楼



旧正月でおなじみの2頭の獅子



ゲイパレードで見物者と一緒に写真を撮るゲイの人たち

ことがあるが、どれもほとんど変わらない。

パレードで興味深く見たもうひとつの光景は女装した男性たちの集団であった。ゲイパレードと言つてもよいのだろうか。彼らは踊りを舞いながら通りを練り歩き、広い空間があるところに来ると、そのうちの一人が激しく動きながら口の中から火を噴きだすパフォーマン



パレードで口から火を噴いて人々を驚かせている男性



全身を黒く塗った男性が道行く人に寄付を求めている

スをした。その様はまるで手品師を見ているようだった。また、何人かの人々が赤い小さな袋を見学者に手渡していて、最初それが何だか分からなかったが、よく見ていると、それは寄付を募るものであった。彼らのような存在は他のアジアの国ではタイ以外に見られないと思うが、フィリピンではよく見かける。

もう一つチャイナタウンでの楽しみは食である。街を歩いていると、本場中国では目にすることが出

来ないようなフィリピン流中華料理を味わうことが出来る。例えば、ルンピア(春巻き)、パンシット(スパイシー麺)、インドネシア風揚げ出し豆腐などがあり、また中国本場に引けを取らない水餃子や揚げ餃子もあり、大いに堪能したことは言うまでもない。

これからもマニラに来たならば、何度でもチャイナタウンを訪れてみたい。さらに、もっと街を歩き、食の探訪も大いに果たしたいと考えている。

ぼくが見て感じたスリランカ紹介86

スリランカ・カレーよもやま話—その3

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

スリランカにはカレーと言う名の食べ物は無いと最初に書きました。それではなぜ英語ではCurryという料理名で呼ぶようになったかには諸説あります。

この事を考えるには、スリランカとインドを一つの地域として考える必要があります。ヒンズー語にはターカリーという「香り高い食べ物」を意味する言葉や、タミール語にはカリという「神に供える野菜料理」とか「汁物料理」、「料理の具」を表す言葉があります。他にもお釈迦様が命名したとか諸説があります。現在でも、インド料理店で一皿に色々な料理がセットされて出てくるプレート料理をターリーと呼んでいます、これも関係あるかもしれませんね。

恐らくはスリランカやインドで、ヨーロッパ人が初めて経験する味の料理を食べた後で、現地の言葉は判らないので料理を指さして、この料理は何という名前だと現地の人に訊いたのでしょう。訊かれた人にしても、ヨーロッパ人の言葉が判る訳もなく、適当にターカリーとかカリ、ターリー等と答えたのに違いありません。これが巡り回ってCurryという一つの言葉になったのではないかと僕は考えています。

Curryは英語ですが、スリランカやインドには、イギリスだけでなくポルトガルやオランダ、フランス、イタリアを初めとしたヨーロッパの列強がスパイス求めて大挙として押し寄せていました。最終的には

スリランカとインドはイギリスの植民地になりましたが、それ以前には短期間ではありますが、イギリス以外の国々が部分統治をしたり、植民地化していた時期があります。つまり、イギリス人がカレーを食べた頃と同じ時期か、それよりも前に、カレーを食べたヨーロッパ人がいて、異国の食べ物をターカリーやカリ、ターリーと其々の母国の発音で呼んでいた事でしょう。これらが下地になって英語のCurryという言葉が生まれたのではないのでしょうか。いずれにしても、最初は辛い料理をカレーと呼んだのではなく、スパイシー且つ懐かしい異国の料理をカレーと呼んでいた事には間違いのないようです。

カレーの語源の話はこれ位にして、次は「とろみ」の話をしましょう。スリランカのカレーは色々な食材をこったに使った日本のカレーと違って、それぞれの単独の食材だけを、これを最も生かす何種類かのスパイスによって調理します。国内のスリランカ・レストランやスリランカ・フェスティバル等でカレーを食べた事のある方はご存知でしょうが、スリランカのカレーには全くとろみがありません。

国内の家庭やレストランで私たちが食べ慣れているカレーは、カレールーを使ったり、小麦粉を炒め入れたりしてとろみをつけています。最近では日本でもスープカレーと言う食べ物が流行っているようですが、これはとろみが無いだけで普段食べ慣れているカレーと同じ様に、色々な具材が混ざっていますね。スリランカのカレーを水っぽいと言うと語弊がありますが、まさしくスリランカレーは単独の食材が、個々の食材に合わせたスパイスで調理され、全くとろみのないスープと共に一皿に盛られる料理です。そう言えばブリヤーニという全く汁気のない、ドライカレーとは異なった炊き込みご飯の様なカレーの一種もありました。これは機会があればお話ししましょう。

なぜ日本におけるカレーは、スリランカやインドのカレーとこれほどに食感が異なっているのでしょうか？これは日本にカレーが紹介された経緯の違いであると思われます。前回に書いたように、江戸時代末期から明治時代初期に三宅秀や山川健次郎らによって記録されている、カレーのイメージは食べ物としてはあまり良い物ではありませんでした。それが故

に、スリランカやインドから直接にはカレーという食べ物に日本に紹介される事は無かったと、僕は考えています。

明治時代初期、文明開化の日本では西洋のものならば全て、日本のものより優れていると言う発想があり、それまでの日本固有の食文化に無かったすき焼きなどの肉料理が入ってきました。江戸時代後期には鎖国をしていた事もあり、西アジアのスパイスはそんなに多くは輸入されていなかったと思われます。それらが起因となり、日本にはカレーに類するような料理は生まれなかったのでしょう。

日本には、スリランカやインドからヨーロッパ各国に渡った後に、西洋料理としてヨーロッパから伝わってきました。最初から、スパイシーなアジアの食べ物として、日本に直接紹介されていたのならば、日本人が得意とするアレンジ能力によって、段々と改良されて今日のカレーとは全く違った料理になっていた可能性があったかもしれませんね。

(続く)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

中国の笑い話 22 (「365夜笑話」より)

■第59話: 芯を量らない (量芯[良心]が無い)

大工に一人の弟子がいた。この弟子は、上っ面の技を身に着けただけで、自分は仕事が出来ると勘違いして、年老いたこの師匠(大工)に構わず、独立してしまった。

しかし、この弟子は独りでは大鋸を使えなかった。ある日、偶然師匠の家の前を通りかかると、師匠が独りで楽々と大鋸を使って木を切っていた。彼は、こっそり師匠の動きを観察し、木の寸法を量った。家に帰って同じようにしてみたが、鋸はちっとも動かない。仕方が無いので、彼は再び師匠の家に行って、教えを請うた。

(次ページへ)

師匠は弟子に尋ねた。“お前は、木の胴回りを量ったかね？”

弟子「量りました」

師匠「木目を量ったかね？」

弟子「量りました」

師匠「木の芯(心)を量ったかね？」

弟子「芯…、芯は量りませんでした」

師匠「それだよ、芯を量らないで(良心が無くて)、どうして技が身に付くものかね」

第60話 : お返し

父親「お前、知っているかい、リンカーンはお前くらいの年齢の時にはクラスの中でトップだったんだよ」

息子「知ってるよ、パパ。彼は、



パパの歳には、もう アメリカの大統領になっていたんだよ」

第61話 : 斧が怖い

道德の時間に先生が話した。

「アメリカのワシントン大統領は、小さい時、お父さんが植えて大事にしていたサクランボの木を切り倒してしまった。直ぐに間違いに気づいて、正直にお父さんに話したら、お父さんは彼を叱らなかった」

先生は学生に尋ねた。

「ワシントンのお父さんは、何故ワシントンを叱らなかったのか分かるかな？」

学生の一人が手を挙げて答えた。

「多分、ワシントンが未だ手に斧を持っていたからだと思います。」

(有為楠 訳)

中国四川省・丹巴のスズメ

四姑娘山自然保護局特別顧問・大川健三

3月号の「北京雑感-北京のスズメ」を読み、感想とまで行きませんが、雀について思い出した事を書いて見ます。

雀の大きさは環境に左右されるのかも知れません。寒く餌が乏しい四姑娘山山麓の集落近辺(標高3300m位)で見掛ける雀は有

為楠さんが北京雑感に書かれた

ように確かに日本の雀よりも

小さく感じた事があります。

一方、私が住む丹巴の雀は状

況が違います。私が住んでい

るのは7階建ての政府宿舎(標高

2000m位に建つ)の2階ですが、窓

の外に在る空調外機の上にちよくちよく雀が下りて来ます。その様子を見ていると日本と同じ大きさに感じます。丹巴は餌が豊富なためかも知れません。特に秋に収穫して平屋根に干したトウモロコシや、冬の初めに軒下に吊るされた干し肉は格好の餌になっています。

雀は農家や町の家々の軒先などに巣を作って

いますが、私の家の厨房排気口の隙間にも5年位前から雀が巣をつくり朝夕盛んに鳴いています。この雀だと思のですが、数か月前、たまたま厨房の天井板を外していた日に一羽の雀が部屋の中に入り込み出口を探して窓ガラスに体当たりしながら飛び回っていました。

窓下で疲れてぐったりした所で

窓ガラスを開けてやると、暫

く胸を膨らませたり縮めたり

して呼吸を整えてから飛び

出して行きました。この時、

雀と一緒に住んでいるような、

自然の一部になったような気分

に陥ってしまいました。

ところで四姑娘山麓で(鳥に素人の私でも)

ちよくちよく見掛ける紅雀は、丹巴に住む雀と同じ位の大きさです。この紅雀の中国名は白眉朱雀、和名はマミジロマシコ、学名は"Carpodacus

thura"、英名は"Himalayan white-browed

Rosefinch"です。



画集「史記」の世界を訪ねて ～周原から茂陵へ～ 絵と文 平島克子

‘わんりい’会員の平島克子さんが、長年描き溜めた「史記」に関わる作品をこの度、画集にまとめて出版されました。町田駅東口カリヨン広場脇の久美堂本店(1F奥 エレベーター前 町田市ゆかりの著書の棚)で手に取ってご覧になれます。おついでに折、立ち寄って是非その労作をご覧頂ければと存じます。(4500円+税)

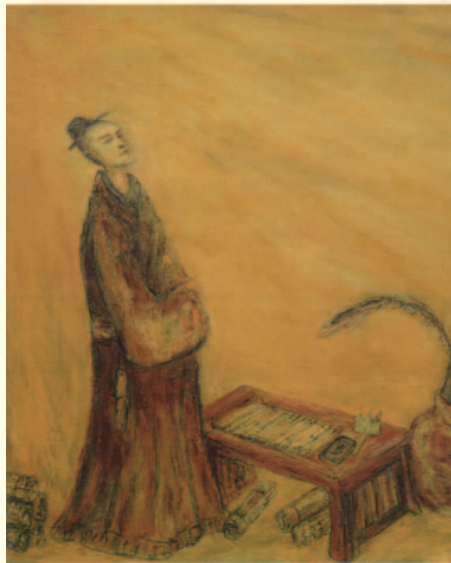
画集「史記」の世界を訪ねて ～周原から茂陵へ～ を出版するに当たって 平島克子

中国黄土地方の人々や風景をテーマに公募展出品や個展での発表を続けて30年になります。でも、本当はずっと昔から司馬遷その人と「史記」の中の伍子胥、衛青、李陵にものすごく憧れていたもので、早くその人たちや物語を画にしたいと考えていました。2013年の個展でそれが実現できましたので、その折展示の油絵43枚と手書きの文章で、歴史の絵本のような画集にまとめました。

長年の思いが形になり嬉しく思っています。

【内容】

- 司馬遷の伝承の証言者 周原の青銅器
- 臥薪嘗胆の世界
- 屈原と郢(郢: 中国春秋時代の楚の都)
- 匈奴との戦い
- 司馬遷像と祠墓
- 茂陵 等



町田中国語講座 (毎月第1、第2、第4土曜日)

- 会場: まちだ中央公民館、町田市民フォーラム、まちだ文学館などの町田周辺の市の施設
- 講師: 郁唯先生(天津師範大学卒業)

※見学ご希望の方は事前に下記へご連絡ください。

- ▲午前クラス 10:15～12:15
- ▲会費: 月謝/3か月 10,000円
- ▲対象: 初心者の方も大歓迎
- ▲問合せ: ☎042-725-3963(森川)
- E-mail: ymorikawan@ybb.ne.jp



- ▲午後クラス 14:00～16:00
- ▲会費: 月謝/4,000円/月
- ▲対象: ピンインの分かる方
- ▲問合せ: ☎090-1425-0472(寺西)
- E-mail: t_taizan@yahoo.co.jp

★午前クラスも午後クラスもアットホームな雰囲気できれい楽しく学んでいます。

初級中国語会員募集 (見学歓迎)

中国語を中国人女性先生が初歩の手ほどきをします。

- 毎月第2、第4木曜日、13:00～15:00
- 藤の台団地内「スペースつばさ」2F
(〒194-0032 町田市本町田3486-1-50-111 藤の台ショッピングセンター内)
- 講師: 張 怡申 先生(中国出身)
- 会費: 1回ごと1,000円
- ◆問合せ: ☎042-732-5081(吉崎12:00～17:00)

岡上中国語研究会新会員募集

中国語を中国人先生から直接聞いて話して勉強してみませんか? 中国語初めての方大歓迎。見学も大歓迎です。

- 毎週土曜日 10:00～12:00
- 麻生市民館岡上分館(〒215-0027 麻生区岡上286-1)
- 講師: 劉 冠群 先生(北京出身)
- 会費: 月謝4,000円
- ◆問合せ: ☎044-988-2031(本間^{ほんま})
E-mail: tizm2008@jcom.home.ne.jp(和泉^{いずみ})

【‘わんりい’ お料理の会の催し】

誰でもできる彩り華やかなキャラクター弁当を作ってみよう！！

叶霖(イエリン)さんと一緒に作る楽しいお弁当

まちだ中央公民館6F・料理室 2015年5月15日(金) 11:00～14:00

- 参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 弁当箱代)
 - ▲ 男の子向きと女の子向きの2種類のお弁当のデモをして頂きます。
 - ▲ 実際に自分で詰めてみましょう(お土産として持ち帰ります)。
 - ▲ 講師を囲んで一緒にお昼を頂きましょう。
- (お弁当向きの中華風おかずを試食しながら頂きます。スープ、サラダ付き)
- 募集人数：15名(最多20名) ● 持ち物：エプロン 筆記用具
- 申込みと問合せ：☎042-734-5100 ‘わんりい’
- E-mail : wanli@jcom.home.ne.jp



イメージ



イエリンさん著の「あなたのためにお弁当を作りたい」が、中国北京で出版され、ベストセラーの書籍の仲間入りするなど、中国の若いお母さんたちの間で好評を集めています。イエリンさんを講師に‘わんりい’が2011年春に催した「キャラ弁の講習会」は若い方が多数参加され、イラストレーターとしても活躍の、イエリンさんの彩りの美しいお弁当づくりのアイディアなど教えて貰い、有意義で楽しい講座でした。イエリンさんの本の出版を記念して、「キャラ弁講習会」第2弾を開催します。多数の皆さんのご参加をお待ちします。

【‘わんりい’ ボイス・トレの会の催し】

～ あなたに元気を贈りたい～ 歌と語りのライブ「花は咲く」



町田市民フォーラム 3F ホール (東京都町田市原町田4-9-8)

小田急線町田駅から徒歩約8分/JR横浜線 町田駅から徒歩約5分

2015年6月5日(金) 14:00～15:30(開場:13:30)

参加会費：2000円(ペア券3000円)

1部 あふれ出る生命力(いのち) Emme エメの唄
※ボイス・トレ体験コーナーもあります

2部 “生きる力”を呼び起こす感動のステージ 楓民^{ふうみん}& Emme エメの唄
楓民:〈語り人〉萩生田千津子/〈唄い人〉Emme
〈奏で人〉松本MOCOが紡ぐ魅惑のコラボ



‘わんりい’ボイス・トレ講師
〈唄い人〉Emme

● 予約お申込み：☎042-735-7187(鈴木)
E-mail wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)

● チケット直接購入：久美堂本店 2F(小田急線東口カリヨン広場脇)
☎042-725-1330

● お 問 合 せ：☎042-734-5100 or wanli@jcom.home.ne.jp



〈語り人〉萩生田千津子



〈奏で人〉松本MOCO

【Emmeのプロフィール】

東京芸術大学長唄科卒業。2001年、唄い手・Emmeとして活動を開始。新しい日本の歌を誕生させる「うたのカタチ」に現在進行形で挑戦中。歌手活動の他、「声のワークショップ」主宰、専門学校ボーカル講師。これまでに4枚のオリジナルCDをリリースしている。EPO、ユーミン、Misia、今井美樹、広末涼子、吉田拓郎等とのコンサートツアー、レコーディングに参加。アイルランド大統領来日のレセプションパーティにて歌唱。2011年、『楓民 ふうみん』(語り人・萩生田千津子、唄い人・Emme、奏で人・松本MOCO)を結成。

◆わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

2015年5月5日(日)/5月17日(日)
まちな中央公民館、第3・第4学習室

- ▲時間：10:00～11:30
- ▲講師：植田渥雄先生
(現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



◆わんりいの催し

**ボイストレーニングをして
日本の歌を美しく歌おう！**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

▲4月28日(火)、まちな中央公民館7F・プレイルーム
※4月は会場が視聴覚室ではありませんのでご注意ください。

▲5月26日(火)、まちな中央公民館・視聴覚室

▲時間10:00～11:30

★動きやすい服装でご参加ください

▲4月の練習歌「心の瞳」
‘わんりい’の新年会で歌おう！

- ▲講師：Emme(歌手)
- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



初心者のための水墨画教室

〈鶴川水墨画教室〉体験のお誘い

生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。気楽にご参加ください。

●講師：満柏(◎日中水墨協会会長)

●場所：鶴川市民センター(駐車場有)
〒195-0062 東京都町田市大蔵町1981-4
<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisei/shiyakusyo/gyomu/shimin/com04.html>

●曜日・時間：

毎月第2、第4(月)

午後2:00～4:00

●体験参加費：1000円
(見学無料)

●問合せ：野島

☎042-735-6135



‘わんりい’ 中国語翻訳勉強会

ボランティアをしながら、中国語翻訳力を付けよう！

‘わんりい’ 3月号でお呼び掛けした「中国語翻訳勉強会」の第一回顔合わせにつきまして下記のように決定しました。今後の活動方針や連絡方法などをご相談したいと思っています。

現在、中国出身の方や留学生を含めて11名の方が参加を予定されています。活動に関心のある皆様のご出席をお待ちしています。

〈第一回顔合わせ〉

●2015年4月29日(祝)14:00～16:00

●まちな中央公民館 6F 第4学習室

◆連絡事項がありますので参加を希望される方は、メールで下記に連絡をお願いします。

◆当日お差し支えがあつてご出席できない方も事前連絡頂ければ、当日の報告をお送りします。

●E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

※念のためcc欄に wanli@jcom.home.ne.jpをお入れください。

‘わんりい’ 202号の主な目次

北京雑感93北京のハト	2
論語断片⑤君子は器ならず	3
媛媛讲故事(72)「和氏璧」VI	4
諺・慣用句(38)「井の中の蛙大海を知らず」	6
中国・城市めぐり(40)上海と普陀山	7
詩人尹世霖の童詩の世界⑪	10
日本探検記(21)「最終話」	11
中国で古典が復活	12
初秋の韓国低山歩き①	14
志津子と私－日中相互学習から老朋友に	17
フィリピン滞在記④マニラのチャイナタウンで旧正月体験	18
スリランカ(86)スリランカカレーよもやま話③	19
中国の笑い話22(365夜笑話より)	20
中国四川省・丹巴のスズメ	21
‘わんりい’ 掲示板 画集「史記」の世界を訪ねて	22
‘わんりい’ 掲示板	23・24

【2015年4月定例会と5月号のおたより発送準備】

両方とも、三輪センター・第3会議室です。

◆4月定例会：4月14日(火) 13:30～

◆5月号おたより発送準備：5月1日(金) 10:30～

＊おたより発送準備の日はお弁当を持参ください。